



大正十一年四月  
大隈侯爵御寄贈

我

朝廷征蕃ノ舉ハ天地神明ニ誓ヒ世界

萬國ニ對シ毫ミ愧ツ可ラサルノ大義ニ

シテ恂ニ

聖朝ノ盛事曠古ノ傳典古先聖王賢

輔ノ為ス所何ヲ以テ之レニ加ヘン然リ而シテ

昨春派清ノ我使臣總理各國事務衙

門トノ應接後澄ト為ル可キ一序ノ記書

アルト無キト彼日生蕃ノ地ハ昔ノ清國ノ

蕃地事務局

版圖ト見認スルヲ中外士民或ハ朝  
議ヲ踈漏シ或ハ其非我手ニ非ルト  
疑ヒ謬聞訛傳物論紛紛遂ニ是非真  
ヲ亂ルニ至ル此際清國政府異議ヲ唱  
書ヲ我外務卿ニ致セシヨリ爾來滋蔓  
彌生シ兵備益張ルトノ聞アリ果シテ然リ  
ハ我  
政府友邦ノ情誼ヲ重セラレ其嫌疑ヲ解  
シタノ見表キニ柳原公使ヲ派セラレタル御趣  
旨ニ及スルヲ以テ臣利通貴重ノ

詔書ヲ忝シ派清ノ  
命ヲ奉スル所以ナリ則チ八月六日東京發  
軼途ヲ上海ニ取リ九月十日清京安抵各  
國事務衙門王諸大臣等ト數回談判  
照會往復ヲ重子十月五日ニ臻リ斷然決  
別ヲ告ケ同十八日ニ及ンテ西便ノ辦法ヲ談  
ス續テ廿日廿三日ノ應接ニ及フト雖モ未成  
局ヲ見ルナク歸裝既ニ整ヒ發途ノ際ニ  
臨ンテ彼終ニ改圖ノ意アリ十月三十一日  
ニ至リ和議全ク成リ條約交換ノ結局ニ及

ヘリ抑此件タル國象ノ重事ニシテ目利通  
微カノ能ク致ス所ニアラズ況ヤ和戦ノ兩議ヲ  
決スル素ヨリ以テ易ト為ス可ラス清國  
政府銳意以テ我ト雌雄ヲ争フノ意アルニ  
非スシテ專ラ和好ヲ主張シ動モスレハ我  
レニ曲名ヲ負ハセントスルノ底意無キニ非  
ス故ニ談判破ルト雖モ蕃地屬吾ノ論  
一決セサルノミニシテ彼レノ啓蒙ヲ待ツニ非  
ズハ我カレリ交兵ノ名義有ルナシ如何トナ  
レハ我カ征蕃ノ喫手タル義務ニヨリ出テ其

ノ成サント欲セシ所ノ目的ヲ遂ケ畢リタレハ  
ナリ之邊ニ戦ニ決スル能ハサル所以ノモノ一  
ナリ彼レ和好ヲ以テ辦法トナシ空シク我カ  
兵ヲ撤セシノ將來ノ所分ヲ彼レニ任セシ  
ヲレフ之レ從前榭原公使へ談スル所ニ  
テ目利通繼テ之ヲ論スルニ至リ遂然續金  
ノ事ヲ開談スル機會有ルニ非ス故ニ何題  
ニ條ヲ基本トシ公道正理ニ服サシムルヲ要  
セシ所以ニシテ之レ邊ヲ和ヲ以テ決シ能ハ  
ル所以ノ一ナリ此ノモノニ至リ目利通

筆先辱辱焦意氣知過其急成ヲ欲スト  
雖モ如何トモスル能ハス任再日ヲ費シ月  
ヲ重子以テ今日ニ至ル實ニ勢ニ止ムヲ得  
サルニ出ルト雖モ此レ臣利通不肖謏劣  
然ラシムル所ニシテ其ノ十分ノ功ヲ奏スル  
能ハス却テ  
御趣旨ニ戻リ候段恐懼戰慄ノ至リニ  
堪ヘズ茲ニ別紙派清以來ノ概畧ヲ記シ  
互換條約互換憑單二通ヲ相添此段  
謹而復

命仕候誠恐誠惶頓首謹白

明治五年十一月

全權辦理大臣大久保利通

臺灣總督府

復命概畧

第一節

台湾ノ東南部ナル獨立ノ生蕃割殺ヲ以テ習トシ  
 東海ノ一害ヲ為スル已ニ久シ明治四年十一月琉  
 球ノ民六十六人台湾ニ割着シ牡丹社蕃ノ為  
 ニ横殺被ハリ十二人ノ者僅ニ逃レ回リ殘剩ノ  
 行ニ聞クニ忍ビサル所ナリ此事琉球ノ官吏  
 ヲリ我カ政府ニ訴ヘタリ是レ獨立ノ國トシテ  
 置テ問ハサレリ理有ルナシ我カ政府即チ彼  
 ヲ殺シ兵ヲ派シ罪ヲ問フ事ヲ一決セリ惟々生

臺灣總督府



督照會ヲ贈リテ退兵ヲ得シ其後督辦大臣  
潘爵又西鄉有督ニ面會シ種ニノ結構ヲ以テ退兵  
ヲ勸説シ柳原公使北京ニ至レハ總理衙門再三照會  
ヲ發シテ侵越疆土ト云焚掠地土ト云犯條約等  
一歎ト云ニ至ル柳原公使ヨリハ台番實地ノ景況ト  
從前ノ事案ト昨年衙門大臣異論ナカリシ更ニ  
ヨリ其版圖外ナルヲ辨駁シ往復面晤數回ニ  
及フト密モ牢ノ回ス可ラス

第三節

於是我力

天皇陛下深ク兩國ノ大事ヲ軫念シ玉ヒ更ニ臣  
刺通ヲ以テ全權辦理大臣ニ任シ專ラ此更ヲ辨  
理シ兩國ノ慶ヲ謀ラシム臣利通北京ニ至リ九月  
十日柳原公使ト衙門大臣トノ議論文案ヲ熟悉ス要ス  
ルニ版圖屬不屬ノ異同ニ過キズシテ双方ノ言  
ハ所既ニ底蘊ヲ盡シ更ニ反復主張スルモ益有  
ル可ラサルヲ察シ即チ衙門大臣ト面談ノ始  
ノニ於テ彼ノ版圖ノ説ニ就テ我力疑問ヲ發シ  
先ツ其版圖タルノ實據ヲ知ラシヲ要セリ此  
ノ時間且ニ條約ヲ其ノ大意ハ第一ニ既ニ版



圖ト云フ時ハ必官ヲ設テ傳導スルノ実アル  
ヘシ今生番ニ何等ノ政教有リ乎第二ニ万国姓  
来シ各国皆十航旅ヲ保護ス今生番海路ノ障ヲ  
ナシ屢々漂民ヲ害ス之レヲ度外ニ於テ懲辦セ  
ル他國ノ人民ヲ憐マズシテ唯生番殘暴ノ心ヲ  
養フ此理有ル乎彼レ逐條若辨シ我レ亦逐層詰  
問ス要スルニ彼レノ答ハ第一台湾府志ヲ以  
テ據ト為シ第二番民輸餉猶納稅如シヲ以テ證ト  
為シ第三社學ヲ設ケテ教意ヲ寓スルトシ第四  
就近府縣廳ニテ分轄シ官ヲ設ケサルニ非ズト

去フニ過キス抑モ清人ノ足跡至ラザルノ地ヲ  
設ケテ分轄スト為シ劫殺ヲ俗トスルノ民ヲ以  
テ教學有リトスルニ至テハ名實相及ニ深ク辨  
スルニ足ラス其ノ台湾府志ハ却テ山内ノ生  
蕃ハ版圖ニ入ラス聲教及ハス等ノ語ヲ載セ又  
所謂輸餉ナルモノハ賸社ノ稅ニシテ民稅ニ非  
ル下ハ續修台湾府志及淡水廳志等ニモ明カニ  
記載セリ賸社ノ稅トハ生蕃ト支那人トノ間ニ  
專權ノ權利ヲ收メ文那官海年商人ヲ集メテ其  
ノ利處ノ專ニ一年ニセザラズ合内外其ノ高人ヨリ納  
管地事務局

ケテ生著一翰餉付番ヨシテ外通ヲ註飾ス故  
戸部ノ丹著ニ翰餉付番ヨシテ外通ヲ註飾ス故  
載レテ過キス此事實ハ交易ノ人ヨリ納ル商  
税ニ過キス此事實ハ交易ノ人ヨリ納ル商  
テ彼レノ舉ル所ノ證ハ以テ證トスルニ足ラス  
ト云フ論シ又我ヨリ舉ル所ノ證ハ第一實歴  
ニ據ルソ生蕃割殺ヲ俗ト為シ髑髏累々モ漢  
人ヲ仇トシ視稱レテ世仇ト為ス第ニ各國ノ  
地理書ニ據ルニ皆十台湾島分レテ二部トナリ  
其ノ一部ハ無主ノ野蕃ナル事ヲ載セ第ニ支  
那ノ志衆ニ版籍ニ入ラス等ノ語アリ第ニ從  
前諸國ノ割民難ニ逢フ者清國官吏一度モ蕃民

ヲ懲辦シタルヲナク却テ米國領事ニ對シテ  
不収入版圖ノ語アリ第ニ昨年柳原公使衙門  
ニ告知シタル時衙門大臣異議ナキノミナラス又化外  
不理ノ語アリ第ニ歷次ノ照會ニ不經以法律  
等ノ語アリ是等ヲ總テ論スルニ蕃土ニ政教  
ナク蕃民ヲ懲辦セサル事歴々トシテ徵ス可ク  
已ニ生蕃ニ政教ナキヲ明瞭ナル上ハ萬國公法  
ニ據ルニ無政ノ地ハ版圖タルヲ得サル事諸  
家共同ノ論ナリ因テ諸家佔有管屬ノ義ヲ論セ  
シ條章ヲ彙抄シテ照會ニ附シテ閱ニ具ヘタリ然

蕃地事務局

ルニ彼レ我カ問ハ所<sup>ニ</sup>以テ問官ノ訊供ニ  
等シトナシ政教ノ有無ヲ論スルハ彼レノ内政ニ  
干預シ條約第三條ヲ犯ストナシ以テ第一  
問目ヲ防キ又中外交渉事件ハ必ス照會文函  
ニ憑テ查辦スルヲ例トシ照會無ケレハ查辦セ  
スト云フヲ以テ第二ノ問目ヲ避ケ又萬國公法  
ハ西洋ノ事ヲ記載スルノ書ニシテ支那ニ關係  
ナシト云ヒ未能詳悉公法精義ト云ヒ要スルニ  
何等ノ事證何等ノ事理アルヲ問ハスシテ一意  
取圖ノ說ヲ固守シ獨リ文渉ナキ所ノ條約第一

條ト第三條ヲ引テ以テ我ヲ拒ムノニ數回入往  
復大意之レニ過キス是ニ於テ臣利通此ノ事口  
舌ノ能ク了スル所ニ非ルヲ知り十月五日ノ談判  
ニ於テ歸朝ノ外他事ナキヲ申シ放シ猶十  
日ニ至リ五日ノ期ヲ刻シ照會ヲ送ル大意ハ勿好  
條規第一款ヲ引キ侵越疆土ヲ論スルハ是レ  
人ニ加フルニ不容之罪ヲ以テス今又覆討論  
シテ取圖ノ說已ニ實據ナク情事漸ク露ハルハ  
ニ及テ猶ホ前說ヲ固守スルハ我カ断シテ受ケ  
ナル所ナリ是レ鮮<sup>ニ</sup>端<sup>ニ</sup>滋<sup>ス</sup>其咎彼レニ

在り今五日内ニ翻然改圖別ニ兩便ソ辦法アラ  
スハ彼レヨリ和好ヲ棄ツルモノナリト言ヒ送レリ  
彼レ延期ヲ乞ヒ十六日ニ至テ照覆シ又副ユル  
所ノ文函ニ旅館ニ来リ面晤シテ辦法ヲ談ス可  
キ旨アルニヨリ姑ク議論ヲ閣キ十八日衙門  
大臣来晤廿日廿三日互利通衙門ニ踵リ商議  
セルニ彼レ我カ討蕃ノ舉ヲ義舉トシ又償報ノ事  
モ理アリト然レモ彼體面ヲ妨リニ甘名義ヲ恩典撫卹ニ  
假ラント云ヒ到テ文書ヲ以テ現約ヲ定ムル一能ハスト  
云フニ至テ互利通事ノ成ラサルヲ判シ辦法ヲ議

合ハカル上ハ番地ノ事ハ本国ニ於テ征服ノ目的  
ヲ達スル而已ト申シ放シタリ猶十月廿五日照  
會ヲ送り此ノ案己ニ口舌ノ能ク了スル所ニ非  
ル時ハ兩國只夕各々見ル所ヲ行ヒ以テ自主ノ  
權ヲ達スル有ル而已ト云ノ意ヲ明言シ榊原公  
使モ亦請觀ノ事許サレス且ツ中國ヲ輕侮スル  
等ノ語アリ義以テ一日モ留ムル可ラカル旨ヲ  
照會セリ將ニ廿六日八時ヲ以テ兩使共ニ登程  
セントス然ルニ廿五日ノ黄昏英國公使ウエート  
氏遠カニ旅寓ニ来リ且ク總理衙門諸大臣金

五十万テールノ額ヲ償ヒ其所欲ノ証書ヲ  
出ス可クト決セリ日本大臣ニ内諮陳述アリ  
タシトノ依囑アリ故ニ来ルト則チ臣利通  
欲スル所ノ三條ヲ記シテ示シタリ遂ニ議  
決シ和成リ三十一日條約交換相濟タリ

合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日  
合六十年五月廿五日